

性同一性障害 東海の団体15年

「生きる力を」患者支える



会の活動を振り返る松尾かずさん 名古屋市中区千代田

体と心の性が異なる「性同一性障害」で悩む人を支える東海トランスサポート(TTS)ファミリー(名古屋市中区)が発足して十五年を迎えた。病氣として認められ診断を受ける人が増える一方、安全な医療体制や生活面の課題は残る。代表で泌尿器科医の松尾かずさん(四三)は「だれもが健康で仕事をもち、社会で生き抜く力を身に付けてほしい」と活動を続ける。(柚木まり)

性同一性障害が知られ始めた一九九六年ごろ、大学院生の松尾さんは診断を受けて女性として生活を始めた。九八年に知人と会を設立。「患者の立場で治療をしたい」と三十一歳で医師を志した。現在は名古屋大に籍を置きながら、性別適合手術を学ぶため札幌医科大学で治療にあたる。

性同一性障害学会理事の中塚幹也・岡山大教授(産婦人科)によると、専門知識をもとに治療できる医師は国内に数十人程度。手術ができる大病院は札幌医大、岡山大、山梨大だけだ。TTSファミリーには人間関係の悩みや治療の相談が相次ぐ。

東海地方の二十代女性は五年前、肝機能が悪化した。感情も不安定となり、就職活動がうまくいかなかった。「早く男らしくなりたい」と望み、医師から体に合わない多量のホルモン剤を投与されたことが原因。松尾さんの助言から体調は改善し、男性として勤務できる職場も得た。今は「経済的

にも健康的にも生活がままならなければ、体が男になっても幸せにはなれないと気付いた」と話す。

三十代の女性は、性別適合手術で切除した胸の一部が壊死してしまい、松尾さんに相談して再手術を受けた。TTSでは親向けの会会も開いており、女性の父親(父)は「最初は勝手に手術を受けた怒りや悲しみが込み上げたが、今は私の知識が無く支えてやれな

かった悔しさが残る」と語る。TTSでは半年間の講座を開き、自覚する性別で働くための法知識や医療との付き合い方を学ぶ。これまでに中部地方の各地から約百人が受講。「手術で男になり、思うように生きたい」と娘から打ち明けられた母親(母)は親子で参加し、「正しい治療で後遺症に悩まず、幸せに暮らしてほしい」と願う。

中部地方の医療機関で自ら性別適合手術をすることが目標の松尾さん。ただ、外見や治療に「変わる患者に「性別を変えても、社会で生きていけない」と強調してきた。その思いを変えず、「いつでも相談ができる場所を守り続けた」と力を込める。TTSへの問い合わせはEメール「tts-net-admin@tunagu.gr.jp」へ。



性同一性障害 心と体の性が一致しない障害。治療法にはカウンセリングやホルモン療法、性別適合手術などがある。

2004年施行の特例法で、性別適合手術で生殖腺の機能がなくなることなどの条件を満たし、家庭裁判所で認められると性別変更ができるようになり、12年までに約3600人が認められた。